特別講演　1

生きる力のみなもとへ　子どもの虐待に向き合うとき

森田 ゆり（エンパワメントセンター）

プロフィール

米国と日本で過去 25 年間、子ども、女性への暴力防止専門職の養成研修に携わる。その間カリフォルニア大学主任研究員として、多様性、人種差別、性差別など人権問題の研修プログラムの開発と指導に携わる。日本に CAP（子どもへの暴力防止）プログラムを導入。現在は日本でエンパワメント･センターを主宰し全国で研修活動をする。

著書「聖なる魂」（朝日文庫）で朝日ジャーナル･ノンフィクション大賞を受賞、「あなたが守るあなたの心、あなたのからだ」（童話館出版）産経児童文化賞を受賞、「子どもと暴力～子どもたちと語るために～」(岩波書店)、「ドメスティック･バイオレンス」(小学館)、「エンパワメントと人権：心の力のみなもとへ」（解放出版社）、「癒しのエンパワメント：性虐待からの回復」（築地書館）、「しつけと体罰」（童話館出版）、その他日英文著書多数。第 57 回保健文化賞受賞。

http://www. geocities.jp/empowerment9center

公衆衛生の視点

疫病対策や健康管理は、公衆衛生の最もよく知られた分野だが、子どもの虐待、ドメスティック・バイオレンスもまた公衆衛生の最重要課題である。子どもの虐待を公衆衛生の問題と認識することによって、次の三つのことが明らかになる。

1. その緊急性。従来の福祉行政のアプローチは、ニーズのある人がサービスを求めてくるまで待つことだったが、公衆衛生の視点は、積極的にアウトリーチしていくスタンスを明らかにする。
2. 日本中津々浦々の保育所や学校を場にして、健康診断を行って疫病予防と健康管理を実施する日本の公衆衛生施策は、国際的にも高く評価されている。虐待予防も同じように地域コミュニティーの核としての学校、幼稚園、保育所と保健センター、病院を場にして研修・啓発を徹底することで、他国のモデルとなり得る優れた虐待予防施策を実施できるはずなのである。
3. 虐待問題を個々人または個別家族の病理に閉じ込めてしまうのではなく、広く社会的コンテクストで捉え社会環境の整備改善による解決を目指す。

心の応急手当

虐待を受けている子どもたちに共通する特徴の一つは、そのことを誰にもいえないでいることである。大阪岸和田で起きた衝撃的な中学生への虐待事件は、乳幼児にとどまらず年齢の大きな子どもたちもまた虐待のターゲットであり、誰にもいえないでいることを明らかにした。

虐待被害体験がしばしば深刻なトラウマとして作用するのは、暴力そのものがもたらす心的外傷と並んで、誰からも救いの手が差し伸べられなかったことに起因する。70 年以上も前に精神分析医シャンドール・フェレンツィはそのことを「一人でいることがトラウマを形成する」と名言した。

筆者は公衆衛生としての虐待被害対策として「心の応急手当て」を提唱している。　被害体験がもたらした様々な感情をなるべく早くに身近な人から傾聴し共感してもらうことで、被害者は自己治癒力を発揮してレジリアントな自我形成を可能にしていく。

虐待は世代連鎖すると安易に言われるがそれは正確な知識ではない。国際レベルの調査では連鎖は 3 割と言われている。すなわち 7 割は連鎖しないのである。この 3 割の連鎖を限りなくゼロに近づけることが私たちの課題である。もしそれが可能になったら、マスコミをにぎわしている多くの殺傷事件も、少年少女の非行事件も起きずにすむに違いない。

大人が子どもたちにあげることのできる最良の贈り物は、傷ついた心に「手」を当てること。　すなわち聴くことである。 指導するよりも、尋ねるよりも、聞くよりも、聴くこと。　この心の応急手当をなにげなく暮らしの中ですることのできる大人を増やしていくことは、公衆衛生としての虐待対策のきわめて効果的方法である。

いちばん悲しいときは　　気持ちがわかってもらえないとき
いちばんうれしいときは　　気持ちが通じ合えたとき
いろんな気持ちがある　あなた　　そのままのあなたで　いいんだよ
いろんな気持ちを大切にして　　ぐんぐん大きくしあわせになる

『気持ちの本』（森田ゆり著　童話館）より